

山崎文庫にもこれはいっています。山崎先生は裏表紙をすてていますので、編集者、発行者がだれであつたかわからぬ部分があります。

それを発行していた学校の図書館にもその雑誌がそろっていないものがあります。ある雑誌の全巻にあたるには、いくつかの図書館をまわらなくてはなりません。ここは図書館同士が協定して、どこではどの雑誌を全巻そろえている、というようにしていただくと便利です。

精神科ではとくに社会史、事件史が大事で、新聞や週刊誌といった資料も重要です。新聞も一週間たつてある記事をさがすとすると、たいへん苦労します。情報がおおすぎる情報化社会では、今についての資料は今自分で整理していかなくてはなりません。情報化社会ではまた、声のおおきい人が情報媒体を占拠して、ちいさな声をかきつけてしまっています。ぼくが参加してきた出来事についても、声のおおきい人が自分に都合のいいことをいって歴史をゆがめています。のこされている歴史には、きりすてられている部分がおおすぎるにちがいない、というのが実感です。それだけに、ぼくが心がけているのは、ちいさな運動体の機関誌をできるだけあつめておくこと、また自分の見聞を記録しておくことです。今の記録といつても、すこしすれば歴

史です。こういった、今の記録の方法の体系化も重要な課題であります。

## 8 眼科医療器械保存の CD-ROM 化

奥 沢 康 正

日眼一〇〇周年を期に、各大学眼科教室の器械保存の調査が実施され、東京、千葉、金沢大学眼科教室を除き、大では殆ど保存されていない現状が明らかになった。日本で最も多くの機械類を保存管理しているのは、いずれも江戸期から続く医家である千葉県の千葉彌幸氏、長野県の野中杏一郎氏、それに筆者の三医療機関であつた。筆者は二〇数年来、眼科医療器械を蒐集、保存してきたが、既に骨董価値がある高額な江戸期のものは敬遠し、医療器械店及び廃院となつた眼科医院から処分される器械を無差別に譲り受けた。さらに関西の四大学の眼科教室で処分される多くの器械を拝受した。こうしてできあがつたコレクションであるが、保存に関しては、様々な問題が起こってくる。普及しなかつた個人の考案品や、実験研究用の試作、改造

品などの、器械史の位置づけや、広く普及し、多くの医師により改良改造された器械の場合、どの時点をオリジナルとするのか、という分類の問題。さらに完全にレストアすべきかどうかを含め、修理、保守管理の問題。中でも大きなものは手術室小部屋ほどになる器械の、大きさ、重量、並びに数量に関わる保存スペースの問題は深刻である。筆者も既に個人として保守管理および整理の段階を超えた数量の蒐集品に苦慮している。これらの保守管理のためには特に湿度、温度が一定に保てる保管場所が、整理のためには器械史に造詣の深い人物が必要となる。私的コレクションは将来、文化財として一般に公開すべきであろう。そのためには博物館的な施設の設定運営、財団法人化を痛感するが、その意味で個人での保存能力は極めて低く限度があることを痛感している。そこで、所蔵器械の一つ一つが三次元的にビジュアル化され、器械の使用法などを含め多くの項目によって検索ができるデータベースを備えたバーチャルミュージアムとしてCD-ROMの作成を考え完成に近づけたい。

## 9 裏庭の書庫の管理と蔵書の寄贈

唐 沢 信 安

医学史の勉強と、地域医療の一端を担う医師として老令化した私の健康の管理の二点は、何時もバランスをとるために苦労する毎日である。

医学史の資料にしても、余り多くなると、その管理と保存に思わぬ困難な状態を招いてしまう。そこで毎朝、天候と湿度を見ては、換気扇か、クーラーのいずれかのスイッチを入れるのが、日課として強いられる。

裏庭の書庫には、約十数年かけて集めた、済生学舎に関する資料が保存されているが、その中には、全国から集めた多くの学生達の筆記ノートや教科書、長谷川泰や部下の教師達の書簡を含めて数百点の貴重な資料の数々が分類されて山積となっている。

特に、学生達によって使用された明治期の「顕微鏡」や「細菌学・病理学の標本」を個人で後世に伝えることは、は困難となってきた。